

Title	中高ドイツ語文芸作品におけるwîpflichとmanlich : その使用の状況をめぐる覚書
Sub Title	Über wîpflich und manlich in der mittelhochdeutschen Literatur : Einige kontextbezogene Bemerkungen
Author	平尾, 浩三(Hirao, Kozo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.175(272)- 204(243)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0204

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中高ドイツ語文芸作品における

wîplîch と manlîch

—その使用の状況をめぐる覚書—

平尾 浩 三

はじめに

形容詞 weiblich・männlich の古形である wîplîch・manlîch (中高ドイツ語) の中世文芸における使用の状況 —副詞としての用法も含めて— について、若干のメモを集めておきたい。

中世文芸において wîplîch という語はどのような意味あい、どのような内容的関連をもって登場したか? weiblich であれ wîplîch であれ、その基本的な意味は a) 「女性の; 雌の」と、b) 「女性的な〈に〉」に大きく分けられようが、¹⁾ 中世文芸において a) と b) の関係はどのようなであり、「女性的な〈に〉」は、具体的にいかなる内容をもって「女性的」なのか、人が wîplîch に振る舞うと言われるとき、それはどんな振る舞いの可能性を含んでいたのか? そして同じ問題は manlîch に関してどのようなであったのか?

さしあたり、調査対象をドイツ中世文芸盛期 (12世紀末から13世紀) の、筆者の手もとにあるおもだった叙事文芸作品18万余行 („Das Nibelungenlied“, „Kudrun“, „Titirel“ を除いてほとんどすべて Vierheber) に限る。²⁾ さらにまた類義語 wîbin, vrouwelîch, また mennin, degenlîch 等々を含めて Wortfeld 研究と言えるところにまで考察を広げることをここでは断念し、wîplîch と manlîch の二語のみについて考える。これらの制限はたしかに不満を抱かせるが、許された紙幅から言ってやむをえぬものであり、いわば準備的スケッチとして本稿を草することとする。

I. wiplich をめぐって

1. 意味内容による分類

中高ドイツ語内部における時代的变化や作家別の特色などをさしあたって考慮せず、この語の用例を、意味内容からいくつかのタイプに分類してみよう。

a) 性別指示

今日のドイツ語でたとえば die *weiblichen* Geschlechtsorgane³⁾ (女性性器；雌の性器) といった場合、形容詞 weiblich は、「女性の；雌の」という客観的・即物的な性別を表すのみである。ここに「女性的な；婦人にふさわしい；優しい；女々しい」などといった思い入れを認める者はまさかまいまい。これと同様に wiplich がいかなる感情もこめずに「女性の…」という即物的性別を示す例は、当然、中世文芸にも多数見出されると考えられよう。その予想は裏切られる。

この種の用法を探索する場合、die *weiblichen* Geschlechtsorgane の例から推して、wiplich が身体部分に関連する場合にまず注目することは自然であろう。けれども、人間の身体部分の修飾であると言い切れる wiplich は一動植物の雌を指す例が皆無であることは調査テキストの種類からいって肯けるとしても一 筆者の資料18万余行中のこの語の用例116のうち、わずかに次のような1例が見出されるにすぎない⁴⁾：

1) Lemberslint schôz sînen bolz / mit gefüegen worten stolz / gegen Gotelinde . / daz galt si Lemberslînde / ûz *wiplichem* munde, / sô si beste kunde. Helmbrecht 1497-502 (レンベルスリントは彼の矢を、誇り高く巧みな言葉と共に、ゴテリントへ向けて放った。彼女は出来るかぎりには ûz *wiplichem* munde レンベルスリントに応えたのである。)

wiplich が身体部分を修飾する唯一の用例において、この形容詞は単に「女性の（口から）」という即物的性別を意味しない。「女っぽい（口から）、優しい（口調で）」という感情をこめた、それも皮肉をこめた用法なのである。

考察を身体部分に限らぬとして、一般的に見て、「女性の」から「女性的

な；女性にふさわしい」等への意味の転化が比較的弱くしか行われていない用例を探すとすれば、せいぜい次のようなものが見出されるに過ぎない：

2) ... ob si im trüegen guote gunst / mit temperie ûz wûrce kraft, / âne *wiplich* geselleschaft / sô müeser sîne schârpfe nôt / hân brâht unz an den sûren tôt. Parzival 643 · 22-6 (... たとえこの人びとが彼 [=ガーヴァーン] に好意をもち、よく効く薬を薬草から作ってくれたとしても、[寝床の中に] *wiplich* geselleschaft がいなかったとすれば、彼はこの激しい苦しみをつらい死に至るまで味わったに違いない.)

3) ir schoene diu schoenet, / si zieret unde croenet / wip⁵⁾ unde *wiplichen* namen. Tristan 8297-9 (彼女 [=イゾルデ] の美しさは女性全体を、そして *wiplicher* name を美しいものとし、飾り、それに栄冠を戴かせる.)

4) swenne des briesters hant / wandelt gotes lichnamen, / sol si sich danne nicht zamen / von *wiplichen* anegriffen? Von dem gemeinem lebene 156-9 (僧の手が神の御体を変身させるとき [=ミサの間] には、その手は von *wiplichen* anegriffen 遠ざかるべきものではないか?)

5) ... si vuorten mannes kleider an / und hêtenz ofte guot gefân / an manger riterschefte / mit *wiplicher* krefte. Wigalois 9138-41 (彼女らは男子の装束を着け、多くの騎士の戦いに mit *wiplicher* krefte しばしば立派な働きをしてきた.)

しかし「女性の」と「女性的な」等との間に明確な一本の境界線を引くことは、現実に不可能である。その曖昧さを感じさせるものは上例の中にもあるし、また以下に扱うものにおいても同様である。だがいずれにせよ、「女性らしい；女性にふさわしい」等といったニュアンスをまったく含まない即物的性別を表す *wiplich*、すなわち *die weiblichen* Geschlechtsorgane の *weiblich* に相当する *wiplich* の用例が、きわめて稀にしか見出されないということは言えるのである。⁶⁾ これは筆者の調査対象がもっぱら宮廷文芸作品であることと無関係ではないであろう。そしてまた、形容詞 *wiplich* と名詞 2 格 *wibes* との役割分担の問題も関連してくるであろうことを考えると、-lich によって作られた形容詞のもつ一般的な問題に立ち入らねばならぬことともなる。しかしここでは、その議論への深入りは避け

ておこう。

b) 貴婦人称賛との関連で(優美, 誠実, 貞淑, 優しさ, 嗜み等)

wîplichの使用頻度が圧倒的に高いのは、宮廷世界で敬愛を受け、名声に包まれた貴婦人の容姿、心情、振る舞い等をpositivに述べる箇所においてである。数多い用例の中から二三挙げるならば：

6) scône ir arme unde hande, / wol gezieret mit gewande / minneclîch was ir lib al, / wol geschaffen unde smal / unde wîblich genûch. Eneid 5175-9

(彼女 [=カミルレ] は腕も手も美しく、その姿全体は衣によって結構に愛らしく飾られ、形よくほっそりとしていて、いともwîplichであった。)

7) Diu herzoginne Adelheit / was des frô und ouch gemeit, / daz sie daz kint hâte erzogen / und sô gar für unbetrogen / was gelobt übr alliu lant. / dô êrte sie den wigant / und zôch sich wîpliche. Herzog Ernst 159-65 (公妃

アーデルヘイトは息子をそのように育てたことを喜び、それを満足に思っていた。そして彼女はいずれこの国においてもこの上ない称賛を浴びていた。彼女もまたこの若者を敬愛し、wîplichに振る舞っていた。)

つづいて多くの高貴な殿方が、知徳優れたこの未亡人との結婚を望んだことが述べられるのである。

また、次例において王妃ラウディーンが囚われの身のイーヴェインに対して、抗戦能力なき騎士を救わないならば、それはunwîplichであると言うが、(これを裏返して考えられる) wîplichの意味は、文例 53), 54) のmanlichのそれにも通じよう：

8) sit ir iuch âne getwanc / in mine gewalt hât ergeben, / naeme ich iu danne daz leben, / daz waere harte unwîplich. Iwein 2296-9 (そなたはみずから進んで自身を私の支配に委ねたのだから、そなたの命が私が奪ったならば、それはまったくunwîplichな行為であろう。)

文例 6) のwîplichがもっぱら女性の外面的優美さを言うのに対し、文例 7), 8) にあっては、宮廷を統べる婦人たるものは、知徳、威厳、優しき情などを具えた、堂々たる振る舞いを見せてこそwîplichであるという考え方が現れているのである。しかしおよそ宮廷的でpositivな意味におけるwîplichな存在としてどのような属性が考えられていたかを最も端的に示すのは、次の例であろう。

9) hie lit in disem steine / vrouwe Japhite diu reine, / der ganzer tugent
niht gebrast. / ir kiusche truoc der êren last. / an staete gewancte nie ir
muot ; / si was gewizzen unde guot / und truoc die wâren minne. / mit
zühtlichem sinne / lebt si nâch *wîplichem* sit ; / dem volget ganze triuwe
mit. Wigalois 8261-70 (この墓中にヤフォーテ夫人眠る。清らかで、完美美徳を
具え、その貞淑は重き榮譽を荷ない、その不変の心の揺らいだことはついぞな
かった。分別豊けく善き心をもち、真実の愛を抱いた人。嗜み深き思いをもっ
て、*wîplich*な生き方を守り通したが、このような生き方には完璧な誠実が、お
のずから寄り添うものである。)

rein, gewizzen, guot であり, ganziu tugent, kiusche, staete, wâriu
minne, zuht, ganziu triuwe を身に具え, êre に包まれた婦人, 宮廷世界で尊
重されたこれらの良きものを豊かに具えた婦人, そして彼女の生き方が,
wîplicher sit に適っていたとされるのである。

ここに並べられている諸徳が *wîplich* との関連で登場する数多の用例の
うちから、いくつかを引用しよう。宮廷の宴における振る舞い方をギブル
ク夫人は侍女たちに説くが, kiusche (慎み深さ, 貞節) と結びついた
wîplich な *güete* (良さ, 優しさ)こそが, 殿方を振るい立たせるこよなく
愛でたきものであるとして讃えられる:

10) nu gebâret gesellecliche. / nie fürste wart sô rîche, / ern hoer wol einer
meide wort. / ir sitzet hie oder dort, / parrieret der rîter iuch benebn, / dem
sult ir die gebaerde gebn / daz iwer kiusche im si bekant. / bi vriundin
vriunt ie ellen vant : / diu *wîpliche* güete / gît dem man hôhgemüete.
Willehalm 247・23-248・2 (さあ, 愛想良くなさい。どんなに身分高貴な殿で
あっても, 姫の言葉には耳を傾けてくださいます。また騎士殿を交えてすわっ
ているときには, あなた方が慎み深い女性であることを感じていただけるよう
に振る舞うのですよ。親しい女性の傍にあってこそ, 殿方は元気になられるの
です。*wîplich*な優しさこそ殿方の気持ちを高らかなものにするのです。)

また „Titurel“ におけるある箇所では, 女性の優しくて雅びな態度が男
の心にも kiusche (慎み, 貞節) と staetekeit (不変の心, 誠実) を与える
ことが説かれる:

11) Ich weiz wol, swen *wîplichez* lachen enphaehet, / daz imêre kiusche
unde staetekeit dem herzen naehet. Titurel 5・1-2 (*wîplich*な微笑みに迎えら

れると、その心には必ず慎みと誠実が近づくことを、私はよく知っている.)

そして *wiplich* な生き方と結びついて、しばしば登場する徳は *triuwe* (誠実) である。亡夫を慕って泣き叫ぶラウディーンネの姿に、イーヴェインは彼女の *güete* と *wiplichiu triuwe* を見、思慕の念はいよいよつのる：

12) dô si her Iwein eine ersach / unde ir meinlich ungemach, / ir starkez ungemüete / unde ir staete güete, / ir *wipliche* triuwe / und ir senliche riuwe, / dô minnet er si deste mê, ... Iwein 1599-605 (イーヴェイン殿は彼女が一人になったのを見、彼女の深い苦悩、激しい悲しみ、そして彼女の変わらぬ愛、彼女の *wiplich* な誠実、そして夫を恋うる彼女の嘆きの様を見るにつけ、彼の心には彼女への愛がますます強く燃えさかるのであった…)

逆に、夫への *triuwe* を早々に捨てて別の男に靡くのは *unwiplich* である。死んだ(と見られる)夫の傍から妃エーニーテを引き離し、自分との祝言の席に連れようとするオリングレス伯に対して、エーニーテは叫ぶ：

13) ... ob ich nû aeze / und sô schiere vergaeze / des aller liebisten man / den ie wip mê gewan, / daz waere ein *unwiplich* maz : ... Erec 6382-6 (私がいま食卓について、かつて女性の得たもっとも好ましい殿をそう早ばやと忘れるならば、それは ein *unwiplich* maz [女性にふさわしからぬ宴席] であろう…)

なお例 9) にある *wiplicher sit* (婦人らしい生き方〈流儀〉) という結びつきは全部で10例見出されるが、意味の比較的 *neutral* な名詞 *site* と *sin* を例にとり、その付加語として用いられた *wiplich* について考察することも、この形容詞の意味内容を浮かび上がらせるためには有効であろう。*wiplicher site* はさまざまなニュアンスをもちながら、懇ろで優雅な態度、貞淑な生き方、慎み深さ等を表し、*negativ* な意味では一度も用いられていない：

14) si hiez in willekomen sîn / und kuste in an sinen munt. / die andern vrouwen tâten im kunt / ir gruoze nâch *wiplichem* sit. Wigalois 8658-61 (彼女は彼に歓迎の気持ちを表し、彼の口に接吻をした。他の婦人方は *wiplich* な流儀に従って彼に挨拶を送った。)

15) ez enwart nie wip geschicket baz : / der frouwen herze nie vergaz, / im enfüere ein werdiu volge mite, / an rehter kiusche *wiplich* site. Parzival

54・23-6 (彼女 [=ベラカーネ] より美しい女性はかつて生まれておらず、彼女の心は真実の貞淑さ具备了 *wiplich* な生き方を、高貴な伴として選ぶことをついぞ怠らなかった。)

16) ouch sagte mir vrou Minne / daz mit gelichem sinne / mit jâmer in ir herzen vaht / ein wip nâch der naehsten naht, / niht durch *wiplichen* site. Der guote Gêrhart 4993-7 (そしてまたミネ夫人が私に言った。ある婦人が殿と同じ心を抱いて胸中悶えながら [まぐわいのできる] 来たるべき夜を待ち焦がれていたが、それは *wiplich* な生き方にふさわしくないことであった。)

例 16) との関連で言及するならば、みずからまぐわいを求めるのは慎みを欠いた態度であって、およそ *wiplich* な行為ではない。したがってパルチヴァールの寝室をはじめ訪れた貞淑なコンドヴィーラームールスの心境について、作者は、彼女が *wiplich* な掟を守っていたことを明らかにするために、次のような説明を忘れない。

17) ez prach niht *wiplichiu* zil : / mit staete kiusche truoc diu magt, / von der ein teil hie wirt gesagt. / die twanc urluiges nôt / und lieber helfaere tôt / ir herze an sölhez krachen, / daz ir ougen muosen wachen. / dô gienc diu küneginne, / niht nâch sölher minne / diu sölhen namen reizet / der meide wip heizet, / si suochte helfe unt friundes rât. Parzival 192・2-13 (*wiplichiu* zil [女性として守るべき限界] は破られなかった。姫は貞節を変わることなく抱いていたが、彼女についていささかお話しするとしよう。戦いの苦難が彼女を苦しめ、愛する援助者の死が彼女の胸を締めつけていたので、彼女は眠ることができなかった。女王がパルチヴァールのもとへ来たのはそのためであって、乙女を女とするたぐいのミネを求めてでは決してない。彼女が求めていたのは、友の援助と助言であった。)

wiplicher sin という結び付きも少なくないが、これも貞淑や誠実との関連で登場し、やはり例外なく *positiv* な意味において用いられる：

18) uns tuot diu âventiure kunt, / wie von Pelrapeire diu künegin / ir kiuschen *wiplichen* sin / behielt unz an ir lônnes stat, / dâ si in hôhe saelde trat. Parzival 734・10-14 (ペルラペイレの女王がその貞淑で *wiplich* な心を抱きつづけ、報いとして浄福を得る場に到る経緯を、原典はわれらに教えている。)

19) Gahmureten dûhte sân / swie si waere ein heidenin, / mit triwen *wiplicher* sin / in wibes herze nie geslouf. Parzival 28・10-13 (彼女 [=ベラカーネ] はたしかに異教徒ではあるが、かくも誠実な、*wiplich* な思いが婦人の心に住みついたことはついぞないと、ガハムレットはすぐに考えた。)

そしてwīplichは宮廷貴婦人のみならず，都市婦人を称賛する箇所にもやがて登場するようになる．„Seifried Helbling“における理想の婦人の描写の中には次のような箇所が見られるが，彼女が旧来の意味での宮廷婦人であるとは，コンテキストから言って，もはや考えられない：

20) sie was diemüet und wise ; / nâch wīplichem prise / ze got stuont ir gemüete, / umb helfe sīner güete / gert sie dicke hin ze got. Seifried Helbling I・1358-62 (彼女は慎ましく賢明で，wīplichな称賛を求めて，思いを常に神に向けている．優しき恵みの御救いを下さりませと，彼女はいつも神に祈っているのである.)

また商人の妻に関しても：

21) des volgete im vrou Irmengart / in aller wīplicher art. Die zwei Kaufleute 244-5 (その事においてイルメンガルト夫人は，wīplichなあらゆるやり方を尽くして夫に従っていた.)

ところで形容詞wīplichは，どのような名詞にかぶせられることがとくに多かったであろうか？この語が付加語として用いられた総計98例のうち，3例以上の結び付きは次の通りである：

güete	16	site	10	sin	7	pris	7	êre	6
triuwe	6	zuht	5	kiusche	3	herze	3	geselleschaft	3

(以下28種の名詞がそれぞれ2-1回wīplichを付加語として用いられている.)

上表の示すのは付加語としての用法のみであるが，wīplichに関して当時の宮廷人の抱いていたイメージを窺うためには，ある目安を与えてくれるであろう(Ⅱ，2参照)。

c) 感情表現の抑制，男性に対する従順

上記のような宮廷的美徳を具えて生きる女性を，詩人たちはもっとも頻繁にwīplichと呼ぶのであるが，そのような態度はさらに，憂いや怒りなどの激情を外へ向けて発せず，それを密かに内面に抱いて耐える生き方にも連なり，そういった態度との関連でwīplichがしばしば用いられる．たとえば夫エーレクの過ちを知りながら，それを夫に訴えることなく，ひとり己の胸におさめて苦しんでいるエーニーテの生き方を，作者はwīplichとするのである：

22) si begunde dise swaere / harte *wiplichen* tragen. / Êrecke getorste siz niht klagen : / si vorhte in dâ verliesen mite. Erec 3009-12 (彼女はこの苦しみを、いとも *wiplich* に耐えていた。エーレクに向かってそれを訴える勇気を見せてはいなかったのだ。訴えたばかりに彼を失うことにならないかと、彼女は恐れていたのである。)

皇妃アーデルヘイトは、夫たる皇帝が、彼女と先夫の間に生まれたエルンストに対し、中傷に操られて激しく憤ると、やがて彼女は反論を慎んで私室に籠もる。この行動を作者は *wiplich* と呼ぶ：

23) ... si getorste in dô niht mēr gebiten. / mit vil *wiplichen* siten / gienc sie dô dannen drâte / hin zir kemenâte. Herzog Ernst 1019-22 (皇帝にもうこれ以上懇願をせず、いとも *wiplich* なやり方で、彼女はただちにそこを去り、私室に籠もった。)

したがって男性への恨みや怒りをあまりに激しく表現することは、*unwiplich* と言われねばならない。ラヴィーニアは、つれないエーネーフスに対する恨みの言葉を心の中に発したあとで、反省する：

24) wie hân ich nû geredet sô? / daz ich dar zime solde gân / daz wære *unwiblich* getân / und wære laster, tâte ich daz. Eneid 11546-9 (わたしはどうしてあんなことを言ってしまったのかしら。あの方にあんな対し方をすれば、それは *unwiblich* なことだ。ほんとにそんなことをしたら、わたしの恥辱だわ。)

騎士モーリツの眠っている姿を見て怒った伯夫人は、約束していたミネをかなえることなく立ち去るが、その行動を侍女は評して：

25) ir hât ir êre verlorn / ein *unwiplicher* zorn. Moriz von Craûn 1409-10 (unwiplich な怒りによって、奥様は名誉を失ってしまいました。)

そしてこのような感情の抑制は、男性への絶対的服従にもつながる。たとえばエーレクの理不尽とも言える命令にエーニーテはひたすら従って馬丁の役を務めるが、この態度も *wiplich* と呼ばれるのである：

26) vil *wiplichen* si dô leit / dise ungelernet arbeit / und dar zuo swaz ir geschach / an ir herzen ungemach. Erec 3280-3 (まことに *wiplich* なやり方で、彼女は慣れないこの苦役に、そしてまた、彼女の心を苦しませる、あらゆることに耐えたのである。)

d) 激しい感情表現

ところが上に見てきた態度とはある意味では正反対の、抑制のきかない、ヒステリックとさえ呼ばれるべき感情暴発を—それが自己に向けられるのであれ他者に向けられるのであれ— *wiplich*と呼ぶ例も、稀ながら存在するのである。重傷を負って失神したエーレクの上に身を投げて、エーニーテは己の髪をひきむしりながら泣き叫ぶが、この行為を作者は *wiplich*と呼んでいる：

27) daz hâr si vaste ûz brach, / an ir libe si sich rach / nâch *wiplichem* site, / wan hie rehent si sich mite. / swaz in ze leide geschîht, / dâ wider tuont die guoten niht, / wan daz siz phlegent enblanden / ougen unde handen / mit trehenen und mit hantslegen, / wan si anders niht enmegen. Erec 5760-9 (彼女は髪を毛を引きむしり、*wiplich*なやり方で、おのが体を痛めつけた。このようなとき、女性はおのが身を責めるもの。優しき女性は悲しみに遭うと、それに対しては抗いもせず、己の目と手を涙と打擲で苦しめるのが常である。それ以外に、何をすることもできぬのである。)

28) dô si der rede vil getete / und si den Tôt mit ir bete / niht mohte überwinden / noch ir willen vinden / daz er si naeme in sinen gewalt, / vil *wiplichen* si in dô schalt / als ir der wille gebôt. Erec 5908-14 (彼女は盛んに述べたてたが、どんなに頼んでも「死」の君は動かさず、征服せよという彼女の望みはききいれられなかった。すると彼女はいつも *wiplich*なやり方で、思いのままに「死」の君にあたりちらした。)

感情の暴発を *wiplich*と呼ぶとき、それが歓喜の情である例は、筆者の資料に皆無である。悲嘆⁷⁾の情であり、同時にそれは愛する者への思慕、誠実の露われである。その意味において、文芸作品に用いられたこの種の *wiplich*も、婦人を誠実なる者として示しこそすれ、婦人を貶めるものでは決してない。

e) 「悲嘆」との関連で

いずれにせよ、中世文芸に登場する *wiplich*な感情は「悲嘆」との縁があまりにも深いようである。

愛する者を失った婦人が「悲嘆」に浸ることは誠実、貞淑の現れであり、この嘆きこそ *wiplich*である。その情景をわれわれは既に文例 12)、

27), 28) 等に見たが, *wiplich* という語は, およそこのような悲嘆の場に似つかわしいらしい。死んだ(と思われる) エーレクを嘆き悲しむエーニーテに対して, オリングレス伯は:

29) ich muoz iu des von schulden jehen / daz ir *wiplichen* tuot, / und dunket mich von herzen guot / daz ir klaget iuwarn man, / wan dâ schinet iuwer triuwe an. Erec 6223-7 (わたしはそなたにどうしても申しねばならないが, そなたの振る舞いはまことに *wiplich* なものである。そしてそなたが夫殿を嘆かれるのは良きことであると, わたしには心から思われる。なぜならそこにこそ, そなたの誠実が現れている。)

また夫の死を激しく悲しむラウディーネに向かって侍女ルーネテは忠告する:

30) ez ist *wiplich* daz ir claget, / und muget ouch ze vil clagen. Iwein 1800-1 (あなたが悲しまれるのは *wiplich* ではありますが, お悲しみが深過ぎるのかも知れませぬ。)

オルゲルーゼは亡くなった愛人チデガストを偲ぶが:

31) dô twanc si *wiplichiu* nôt / nâch im dennoch ir riuwe. Parzivâl 729・22-3 (*wiplich* な苦しみがその時もお彼を偲ばせて, 彼女を悲しませずにはおこなかった。)

ヴィレハルムがギブルクの愛を得たことによって, 戦いが起こり, 多くの騎士が命を落とすこととなるが, そのためのギブルクの悲しみを:

32) swaz si genâde an im begienc, / diu wart vergolten tiure, / alsô daz diu geiure / ouch *wiplicher* sorgen pflac. Willehalm 14・4-7 (彼女が彼にどれほどの愛を与えたにせよ, それには高い代価が支払われたので, この優れた婦人は *wiplich* な苦悩を味わった。)

またリーアメーレの悲嘆について:

33) im wâren die sine / gar gevangen und erslagen. / daz begunde si herzenliche klagen / mit *wiplicher* swaere ; / ir wart der lip unmaere / daz si ir trût hêt verlor. Wigalois 9971-6 (彼の軍勢は捕らえられるか殺されるかであったので, 彼女は *wiplich* な苦しみを抱いて心から嘆いた。愛する者を失って, 彼女には生が疎ましいものとなった。)

愛する者を失った場合のみならず, およそ嘆き悲しむ行為は *wiplich* とされ, そして *wiplich* な悲嘆は, 心の剛き男子の為し能わぬ, 優しい情の籠

もった行為として、positivに扱われる。苦難の旅の途上、エーレクとエーニーテはアーサー王宮廷の人びとと出会う。アーサー王妃とエーニーテは懇ろに語り合い、睦まじく嘆き合うが、そのような行為が *wiplich* と呼ばれるのである：

34) *dā wart vil wipliche / von in beiden geklaget, / vil gevrāget und gesaget / von ungewonter arbeit / die vrouwe Ênite erleit.* Erec 5107-11
(エーニーテ夫人の蒙った世にも稀なる苦難について、二人はそこでいとも *wiplich* なやり方で嘆き、いろいろと尋ね、また語り合ったのである。)

したがって人の不幸を嘆かないのは、情を欠いた、褒められぬ行為であって、*unwiplich* と呼ばれねばならぬ：

35) *swelich wip daz versaz, / daz si den ungesunden / beweinten niht ir wunden, / daz was unwiplicher muot.* Die Klage. 718-21 (傷を受けた者のその傷に涙せぬような婦人は *unwiplich* な心の持ち主であった。)

しかし *wiplich* な悲嘆は、情の籠もった行為ではあっても理知の所為ではない。妹を妊娠させたことを知った兄が策を失い、嘆き悲しむのは *wiplich* weinen とされる：

36) *diu swester sach ir bruoder an, / si sprach : „gehabe dich als ein man, / lâ din wiplich weinen stân / (ez enmac uns leider niht vervân) ...* “Gregorius 465-8 (妹は兄を見つめて言った。「男らしくなさいませ。 *wiplich* な涙はおやめなさい。(泣いたとてなんの役に立ちましょう) …」)

これにあって *wiplich* は「(女のするように) 女々しい、分別の働かない」行為を指し、明らかに *negativ* な評価を含んでいるが、この種の例は稀にしか見出されず、男性に関して用いられる場合に限られている。

f) 「母性」との関連で

wiplich の用例の中には、とくに母性に重点を置いたものもある⁸⁾：

37) *froun Adelheite der künigin / gemüete moht wol swaere sin, / ob ir unsanfte troumte, / daz ir wipheit ze sorgen zoumte / umb ires lieben sunes nôt ; / ir wiplich triuwe daz gebôt.* Herzog Ernst D 3447-52 (王妃アーデルヘイト夫人は悪夢を見て苦しかった。女性としての彼女の気持ちは愛する子息の苦難を憂えざるをえなかったのだ。それも彼女の *wiplich* な誠実ゆえのことであった。)

そして母性行動は衝撃的に現れることもある。身籠もったヘルツェロイデは激情に駆られて、自分の乳房を口に押しつけるが、このような行動も *wiplich* とされるのである：

38) diu frouwe enruochte wer daz sach, / daz hemde von der brust si brach. / ir brüstel linde unde wîz, / dar an kêrte si ir vlîz, / si dructes an ir rôten munt. / si tet *wipliche* fuore kunt. Parzival 110・23-8 (夫人は誰に見られようと気にせず、肌着を胸から引きちぎり、柔らかで白い乳房を握って、懸命に己の赤い唇に押しつけた。 *wiplich* なしぐさであった。)

g) 「膂力の弱さ」との関連で

稀ではあるが、*wiplich* が「(膂力が女のそれのように) 弱い、萎えた」という意味で用いられる例もある：

39) nû hâten si sich alsô gar / erwüetet und ervohten / daz si niht mêre mohten. / ir slege *wiplichen* sigen : / sô garwe wâren si erwigen / daz dâ von niht schade geschach. Erec 891-6 (彼らはあまりに猛り狂って、剣を振るいつづけたので、今はもう力が尽きた。打ちおろす力は *wiplich* に衰えて、何を傷つけることもなかったのだ。)

2. その展開

wiplich の用例を、その具体的なコンテキストによっていくつかのタイプに分類したが、各タイプ間の境界は必ずしも明瞭ではないので、各タイプの作品別の頻度を綿密に示そうとすることには、あまり意味がないであろう。ここでは用例総数についての作品別頻度を表示するにとどめておこう。

Das Alexanderlied (Straßburger Fassung)	0
Heinrich von Melk : Das Priesterleben ; Von dem gemeinem lebene ; Von des todes gehugde	1 ⁹⁾
Pfaffe Konrad : Das Rolandslied	0
Herzog Ernst	4 ¹⁰⁾
Heinrich von Veldeke : Eneid	2 ¹¹⁾
	(内 : <i>unwiplich</i> 1)
Moriz von Craûn	1 ¹²⁾
	(内 : <i>unwiplich</i> 1)

Hartmann von Aue : Erec	11 ¹³⁾
	(内：unwîplich 1)
Hartmann von Aue : Gregorius	1 ¹⁴⁾
Hartmann von Aue : Der arme Heinrich	0
Hartmann von Aue : Iwein	3 ¹⁵⁾
	(内：unwîplich 1)
Das Nibelungenlied	0
Die Klage	1 ¹⁶⁾
	(内：unwîplich 1)
Wolfram von Eschenbach : Parzivâl	35 ¹⁷⁾
Wolfram von Eschenbach : Willehalm	8 ¹⁸⁾
Wolfram von Eschenbach : Titurel	7 ¹⁹⁾
Wirnt von Grafenberg : Wigalois	10 ²⁰⁾
Gottfried von Straßburg : Tristan und Isold	4 ²¹⁾
Rudolf von Ems : Der guote Gêrhart	11 ²²⁾
	(内：unwîplich 1)
Kudrun	0
Wernher der Gartenaere : Helmbrecht	1 ²³⁾
Konrad von Würzburg : Engelhard	1 ²⁴⁾
Konrad von Würzburg : Heinrich von Kempten	0
Konrad von Würzburg : Der Welt Lohn	0
Konrad von Würzburg : Das Herzmaere	0
Ulrich von Etzenbach(?) : Herzog Ernst D	6 ²⁵⁾
Seifried Helbling	5 ²⁶⁾
Ruprecht von Würzburg : Die zwei Kaufleute	4 ²⁷⁾
	計 116

wîplichが、言語生活においてきわめて基本的な位置を占める名詞wîpから作られたものであることを考えると、全18万余行中のwîplichの用例数116は、筆者の予想したより少ないものであり、この形容詞（副詞）の使用が時代をかなり下ってようやく頻繁になることが、筆者にはいささか意外であった。

また「女性の」という即物的性別を意味する用例がこれほどに稀であるとも、筆者は予想していなかった。

古高ドイツ語における状況はここでは考察外におくが、手もとの古高ドイツ語辞書の²⁸⁾ *wibili(c)h* の項目に „*Pron. -Adj., jede Frau. O.*“, *wiblihho* の項目に „*Adv., wie die Frauen. N.*“ とのみ記されていることから考えて、形容詞（副詞）としての使用が頻繁であったとは期待できないであろう。筆者の資料内においては、この語の最古の用例は十二世紀中葉の Heinrich von Melk によるものであるが、²⁹⁾ „*Das Rolandslied*“ には *wiplich* は皆無であり、³⁰⁾ „*Herzog Ernst*“, „*Eneid*“ 等においても、それはきわめて疎らにしか見出されない。まして意外であったのは „*Das Nibelungenlied*“ に *wiplich* がただの一例も発見されないという事実である。そして時代は下るが „*Kudrun*“ にも *wiplich* はまったく見出されない。いわゆる英雄叙事詩と騎士叙事詩の間の語彙の隔たりを示す例の一つとして注目に価する。³¹⁾

総数においても行数比においても、この語をもっとも頻繁に使用したのはヴォルフラムであり、彼にあっては宮廷的な婦人礼讃との関連において、婦人を讃える名詞にかぶせる付加語としての用例がきわめて多い (*wiplichiu güete / êre*; *wiplicher pris* 等々)。しかし宮廷婦人を絢爛と賛美する場面に多く登場するこれらの用例は、宮廷世界でのすでに固定したイメージを前提としており、現実の女性に対する考察をそこに認めることは不可能であって、文例 26)~29), 34) 等を見れば、現実生活での女性独特の振る舞いに対するリアルな認識をふまえているのは、使用頻度は低くても、むしろハルトマンであったと思われるのである。

II. *manlich* をめぐって

1. 意味内容による分類

wip の反義語としての *man* から作られた形容詞（副詞）*manlich* の意味内容についても、一瞥しておきたい。

a) 性別指示

40) *manliche sprach daz wip, / als ob si manlichen lip / und mannes herze trüege. Willehalm 95·3-5* (婦人は *manlich* に語った。あたかも *manlicher lip* と

男子の心を持っているかのように.)

この二つの *manlich* の間の意味の差異は明らかである。前者が「雄々しく、堂々と、毅然として」を表すのに対し、後者は次行の *mannes* と同義で並べられ、「男子の」という性別を示す。^{3 2)} しかし *wiplich* におけると同様、即物的な性別指示としてのこの種の *manlich* の用例はごく稀である。^{3 3)}

b) 武人称賛との関連で (勇猛, 剛毅, 雄々しさ等)

41) *Wie vil si sorgen dolten, / und wazs ouch freude erholten, / und wie ir manlichiu kunst / wibe minne und ir herzen gunst / mit ritterschaft bejageten, / und dicke alsô betageten / daz mans in hôhem prise sach!* Willehalm 7・1-7 (彼らはいかに多くの苦しみに耐えねばならなかったことか、またいかに多くの喜びを得たことか。彼らの *manlichiu kunst* は騎士の闘いによって婦人方のミネや心からの好意をなんと見事に獲得したことか。そして世の人びとの称賛のうちに日々を過ごしたことか。)

「武技」を指して *manlichiu kunst* (男子の〈男子にふさわしき〉技) という上例が典型的に示しているが、*manlich* の用例として圧倒的に多く見られるのは — 騎士試合におけると実戦におけるとを問わず — 闘いの場での「勇猛」を言うものである。

42) *er brâhte manigen Persen / zô deme strite. / di wâren gesamenet wite / und heten manlichen mût.* Alexanderlied 3243-6 (彼は多くのペルシャ人を戦いの場にもたらした。それは遠くから集められた者たちであり、*manlich* な心の持ち主であった。)

43) *des wart harte grôz diu nôt / in allen tiutschen rîchen, / wan er sich manlichen / sehs jâr des riches werte, ... Herzog Ernst 1188-92* (それゆえにドイツのすべての国々に大いなる苦しみが生まれた。というのも彼は六年もの間 *manlich* に、皇帝に抗して戦ったからである。)

44) *menliche und unervaert / sach man ze beiden siten / vil werder ritter strîten.* Herzog Ernst D 902-4 (大勢の優れた騎士たちが双方共に怯むことなく *menlich* に戦う姿が見られたのである。)

45) *daz ist ein manlich rîten, / wil er mit swerten strîten / und gegen rennen mit dem sper!* Seifried Helbling I・852-4 (剣をかざし、槍を構えて、敵に立ち向かおうとするならば、その馬上の騎士の振る舞いは *manlich* なものである。)

しかし必ずしも戦闘場面とはかぎらず、堂々たる・雄々しい・凛々しい姿を述べる箇所においても *manlich* はしばしば用いられる：

46) zeware, dirre man der ist / ein *menlich* creatiure ; / sin wat und sin figure / si schepfent wol an ime den man : / si zement so wol ein ander an ; / sin dinc ist allez wol gewant. Tristan und Isold 10854-9 (まことにこの男 [= トリスタン] は *menlich* な人物だ。装束と身とが一つになって、非のうしろのなない男子の姿だ。それらが互いに良く似合っている。身に着けているものがすべてすばらしい。)

それは外面的な姿のみならず、女々しさのない心、決然たる態度、毅然とした生きざま等を指すことも多い。グルネマンツはパルチヴァールに教えを垂れて言う：

47) Sit *manlich* und wol gemuot : / daz ist ze werdern prise guot. Parzivâl 172・7-8 (*manlich* でまた意気高らかであるように。それは立派な称賛を得るのに役立つ。)

騎士に対する教えに *manlich* の用いられる類似の例は、他にも見られる。敬神、婦人敬愛、尚武の心の必要を説いたあとに：

48) zem vierten *manlich* hôchgemuot, ... Seifried Helbling VII. 1190 (第四の徳として、*manlich* で意気高らかにあるように…)

したがって悲嘆にくれるのは *manlich* ではない。嘆き悲しむエツツェルを *unmanlich* と呼ぶとき、この用法は l, l, e) に言及された *wiplich* に通じ、男子にあっては *negativ* な評価を受ける：

49) des sîn wir von iu ungewent, / daz ir *unmanliche* tuot. Die Klage 1024-5 (われわれがあなたの *unmanlich* な振る舞いに出会うのはいまだ験しないことだ。)

c) 「膂力の強さ」との関連で

当然のことながら *manlich* は膂力の強さ、逞しさを表すことともなる。たとえば待ち伏せるアスカーニウスに近づいた鹿に対して：

50) den bogen her *manlichen* zöch. Eneid 4638 (弓を彼は *manlich* に引き絞った。)

とあるが、鹿を相手とするこの行為を *manlich* と呼ぶならば、それは「勇猛」よりも、むしろ「逞しい力」を表すと解される。もとより、「勇猛」と

「膂力の強さ」は明瞭に区別されるものではないが、いずれにせよ、エーレクとイーデールスの闘いぶりに用いられた、つぎのような *manlich* は、文例39)の「膂力の弱さ」を表す *wiplich* に相対するものである：

51) *ir vehten was manlich*. Erec 845 (彼らの闘いぶりは *manlich* であった.)
そして闘いが長びいて疲労が現れてくると、エーレクは言う：

52) *unser slege gânt niht manlichen*, / *wir vehten lasterlichen*. Erec 904-5
(われらの剣の振るい方は *manlich* ではない。かような闘いぶりはわれらの名折れになる.)

d) 宮廷騎士称賛との関連で (憐愍、情け、寛大；嗜み、優雅；公正、誠実等)

しかしこの語は、いたずらに「勇猛」「剛健」であるのみならず、宮廷騎士のとるべきフェアな態度を崩さぬ者、寛大で情け深い行動をとる者、優雅な嗜みを保つ者等に関連しても用いられる。婦人の庇護のもとへ逃げた敵を迫害しないことが *wiplich* とされる例はすでに見たが、それと同じ態度が騎士にあっては *manlich* と呼ばれるのである：

53) *Ich hört ie sagen, swa ez sô gezôch / daz man gein wibes scherme vlôch, / dâ solt ellenthaftez jagen / an sime strite gar verzagen, / op dâ waere manlich zuht*. Parzival 415・1-5 (私がいつも聞いたことだが、もしある男子が庇護を求めて婦人のもとへ逃げたなら、どんなに激しく追撃している場合でも *manlich* な嗜みのある騎士は追うのをさし控えるとのことである.)

決闘の最中に剣が折れて抗戦能力のなくなったパルチヴァールを、異教の騎士フェイレフィースは攻撃せず、自分も剣を投げ捨てるが、それも *manlich* と呼ばれる行動なのである：

54) *der heiden starc unde snel / tet manliche site schîn, ... Parzival 747・12-3* (強く勇敢なその異教徒は *manlich* な振る舞いをした…)

また極端な場合、大勢の味方の戦死を悲嘆することこそ *manlich* と呼ばれるもする。こうなると文例 47)~49)に見られる *manlich* なあり方とは正反対で、それはむしろ文例 29)~35)に窺われる *wiplich* なあり方に通じ、悲嘆することが *positiv* な意味で *manlich* とされるに至るのである：

55) *des muoz ich immer jâmers pflegen, / ob ich hân manlichen sin*.

Willehalm 51・18-9 (私に *manlich* な心があれば、私はいつまでもそれを嘆かねばならぬ。)

そして何より、男子たるもの婦人に悲しみを与えず、ミンネにおいて誠実であってこそ *manlich* と呼ばれるのである：

56) *dâ von müeze er unsaelic sîn, / des wünschet im der wille mîn, / swer den wîben leide tuot, / wan ezn ist manlich noch guot.* Erec 5770-3 (それゆえに、女性に悲しみを与える者に災いあれ。それを私の心は願うのだ。そんな行為は *manlich* でもなければ高貴でもない。)

ガハムレットは遠くに残して来た女王ベラカーネを恋うて：

57) *ez ist doch vil manlich, / swer minnen wankes schamet sich.* Parzival 90・27-8 (しかし不実な恋を恥じることこそ、まことに *manlich* である。)

グルネマンツはパルチヴァールに騎士の心得を説いて：

58) *und lât iu liep sîn diu wîp : / daz tiwert junges mannes lip. / gewenket nimmer tag an in : / daz ist reht manlicher sîn.* Parzival 172・9-12 (またご婦人方を愛するように。それは若者の価値を高めよう。婦人方を敬愛するに不変の気持ちをもってするように、それが本当の *manlich* な心というもののだ。)

グルネマンツの教えをひたすらに守るパルチヴァールは完璧な *manlich* *zuht* を具えていたとされるが (Parzival 188・15)、それはいたずらに勇猛な行動に走るという意味ではなく、宮廷人としての嗜みを身につけ、もはや *tumb* ではなかったことを意味する。

そしてさらに *manlich* という語は「宮廷的な、優雅な」をもっぱら意味する *höfisch*, *kurtoys* と併用されさえするのである：

59) *er reit zîn unde enpfienç se sô / daz se al geliche sprâchen dô / daz der werde Gâwân / waere ein manlich höfisch man.* Parzival 677・21-4 (彼 [= ガーヴァーン] はその者たちのところへ行き、丁寧に挨拶をしたので、彼らは皆口を揃えてこの高貴なガーヴァーンは *manlich* で *höfisch* な人物だと言った。)

60) *daz ors von rabbîne spranc / gein dem jungen Franzoys, / der ouch manlich und kurtoys / was und dar zuo hoh gemuot, / als noch der prises gerende tuot.* Willehalm 24・8-12 (駿馬は若いフランス人に向かって襲いかかった。フランス人もまた *manlich* で *kurtoys* であり、加えて栄誉を求める今日の勇士と同様、意気高らかであった。)³⁵⁾

2. その展開

manlichの総用例数を作品別に表示するならば：

Das Alexanderlied (Straßburger Fassung)	10 ^{3 6)}
Heinrich von Melk : Das Priesterleben ; Von dem gemeinem lebene ; Von des todes gehugde	0
Pfaffe Konrad : Das Rolandslied	1 ^{3 6 a)}
Herzog Ernst	17 ^{3 7)}
Heinrich von Veldeke : Eneid	37 ^{3 8)}
Moriz von Craûn	0
Hartmann von Aue : Erec	11 ^{3 9)}
Hartmann von Aue : Gregorius	2 ^{4 0)}
	(内 unmanlich 1)
Hartmann von Aue : Der arme Heinrich	0
Hartmann von Aue : Iwein	5 ^{4 1)}
Das Nibelungenlied	0
Die Klage	2 ^{4 2)}
	(内 unmanlich 1)
Wolfram von Eschenbach : Parzivâl	77 ^{4 3)}
Wolfram von Eschenbach : Willehalm	70 ^{4 4)}
Wolfram von Eschenbach : Titurel	1 ^{4 5)}
Wirnt von Grafenberg : Wigalois	10 ^{4 6)}
Gottfried von Straßburg : Tristan und Isold	9 ^{4 7)}
Rudolf von Ems : Der guote Gêrhart	8 ^{4 8)}
Kudrun	0
Wernher der Gartenaere : Helmbrecht	0
Konrad von Würzburg : Engelhard	1 ^{4 8 a)}
Konrad von Würzburg : Heinrich von Kempten	1 ^{4 9)}
Konrad von Würzburg : Der Welt Lohn	0
Konrad von Würzburg : Das Herzmaere	0
Ulrich von Etzenbach : Herzog Ernst D	11 ^{5 0)}
Seifried Helbling	8 ^{5 1)}
Ruprecht von Würzburg : Die zwei Kaufleute	0
	計 281

古高ドイツ語に関しては辞書^{5 2)}の manlich の項に „*Indef. -Pron.*,”

jeder, jeder Mensch.FP. N. O. TV.”との記載があるのみであるが、中高ドイツ語の文芸作品において *manlich* は *wiplich* よりはるかに多く登場する（総用例数116：281）。この281という用例数とても18万余行中であることを考えると、筆者の予期したよりも、はるかに少ないものである。このような数差の機械的比較が多くの意味を持たないとしても、上表を *wiplich* に関する 1, 2 の表と比較するとき、*manlich* という語の普及が *wiplich* のそれよりも時期的に一步先んじていたことは、疑えないようである。12世紀中葉の „Das Alexanderlied“ における *wiplich* 0 回に対する *manlich* 10 回、1180年前後に成立した „Herzog Ernst“ における *wiplich* 4 回に対する *manlich* 17 回、また „Eneid“ の *wiplich* (+ *unwiplich*) 2 回に対する *manlich* 37 回といった使用頻度の差は、ストーリーから来る偶然と呼ばれるにはあまりに大きい。この現象については、まず *manlich* が一般化して、それに倣って *wiplich* も多用されるに至ったと解されてよいのではあるまいか。

その証明というわけでは毛頭ないが、一つ興味深い事実を指摘しておこう。

„Eneid“ 全編を通じて *wiplich* がただ 1 例使用されていると言えば（他に *unwiplich* が 1 例）、作品中の二人の女主人公ディドー、ラヴィーニアのいずれかにそれが関連していると想像される。事実はそのようではない。この語が用いられているのは、騎士として戦う女傑カミルレに関してのみであり（5179）、彼女は同時にまた *manlich* とも形容される人物なのである（8793, 8827, 8906, 9502）。女性の中でも *manlich* と形容される女性に関してのみ、*wiplich* は用いられているのである。あたかも *wiplich* が *manlich* からの連想においてのみ、ないし *manlich* との二重写しにおいてのみ、登場しえたかのごとくである。

manlich の一般化を迫るように *wiplich* も文芸作品に多用されるに至った現象は、騎士文化の繊細化と密に関連しているのであろうが、同時に *manlich* という語自体もまた、時の推移と共に、意味内容にこまやかさを

加える。

wîplichと同様manlichにおいても、「男性の」という即物的性別の表現は、筆者が予想したよりもはるかに稀である。そしてvorhöfischの世界に属する作品にあってはmanlichの内容はかなり単純で、「勇敢な、怯まぬ」といった類の意味で戦闘場面の記述に多用され、中でも多いのはmuotにかぶせる付加語の用法である。たとえば „Alexanderlied“ における10例中9例、 „Eneid“ における37例中6例^{5,4)}がそれに該当している。manlichが戦闘場面に圧倒的に多く登場することはその後も変わらないが、ハルトマン、ヴォルフラムといった宮廷騎士詩人においてこの語はしばしば微妙な陰影を帯びて登場する。すなわち単なる「勇猛」のみならず、憐愍の情や寛大の心、さらには宮廷人のミンネにおける正しき振る舞いと関連で多く用いられるに至るのである。^{5,5)}とくにヴォルフラムはmanlichをtriuwe, herze, zuht等、宮廷社会で重要視された諸概念を表す名詞にかぶせて多用している。

1, 1, b) の表に倣い、比較の一助として、manlichが付加語としてかぶせられた名詞の総計176例のうちで、3例以上存在するものをここに表示しておこう：

muot	24	site	14	ellen	12	sin	11	wer	11
kraft	8	triuwe	7	herze	6	dinc	5	zuht	5
man	5	ger	4	tât	4	hant	3	vreude	3

(以下44種の名詞がそれぞれ2-1回manlichを付加語として用いられている。)

1, 1, b) での言及に倣って、意味の比較的neutralな名詞siteおよびsinの付加語としてのmanlichについて考えるならば、manlicher siteにおいてはほとんど全例が「勇猛」の意味であり、manlicher sinでは「勇猛」と「(ミンネにおける)誠実」の意味での使用がほぼ相半ばしている。いずれにせよ、positivな意味内容のものである。

両表の比較は、wîplich・manlichの修飾を受ける名詞に関して、さらに興味深いものをさまざまに浮かび上がらせる。

付加語としての総用例数においては、wîplichはmanlichの約半数に過ぎ

ないにもかかわらず、*triuwe*, *zuht*にかぶせられる回数は、両形容詞ともほぼ等しい。*triuwe*も*zuht*も宮廷の男女に共に求められる徳であったとはいえ、これらの徳は婦人において、やはりより重要に扱われていたことをここに窺うべきかも知れない。

また*manlich*とは異なって*wiplich*が*ellen*, *wer*等にかぶせられないのは当然であるが、*manlich*がもっとも多く(24例)かぶせられる名詞*muot*に、*wiplich*は1度もかぶせられないという事実は、中高ドイツ語の*muot*が今日の*Mut*とは異なり、単に「勇気」のみならず情意のすべてにまたがる広い意味範囲を持っていたという常識的な見方を踏まえれば、やはり興味をひく。筆者もこの常識を否定するものではない。しかし付加語*wiplich*・*manlich*の視角から見ると、*wiplich* : *manlich*の用例数比0 : 24は無視されるべきではない。この大きな差は古いAlliterationの伝統からのみ説明されるであろうか？*muot*という語の惹起するイメージが当時すでに男性的、闘争的な感情へとやや傾いていたことをここに読み取することは不可能であろうか？*wiplicher muot*が決して見出されないのに対し、1例とはいえ*unwiplicher muot*は発見される(文例35)という事実も、同じ方向へ示唆していないであろうか？これは、*hoher muot*といった概念の存在を考えても決して意外なことではないが、*wiplich*・*manlich*の視角から行なった一つの認識として記しておきたい。

他方、*wiplich*がもっとも多く(16例)付加語として用いられる名詞*güete*に、*manlich*はごく僅か(2例：*Parzival* 252・23, *Willehalm* 368・19)しかかぶせられないという事実も、宮廷文芸において*güete*という語が惹起したイメージの傾きを探る上にいささかのヒントを与えてくれるのではないであろうか？形容詞*guot*と同様、名詞*güete*も「良さ」「善良」「高貴」「優しさ」「親切」等々にまたがって意味範囲がきわめて広く、作品中でこの語に出会うとき、われわれは各コンテクストにおけるその真意を摸索して苦しむものである。しかし*güete*の付加語としての*wiplich* : *manlich*の用例数比が16 : 2であるという事実は、*güete*の意味を考える上に、やはりある種の拠り所を与えているであろう。

そして manlich が „Das Nibelungenlied“ および „Kudrun“ にただの 1 例も発見されないことは、wiplich におけると同様である。闘争場面に事欠かぬのは共通であるにもかかわらず、たとえば „Willehalm“ においては枚挙にいとまなく登場する manlich が、いわゆる英雄叙事詩にはまったく使用されていないこと、これは単なる偶然とは考えられないのである。

む す び

名詞 man から作られた manlich は 12 世紀中葉から一般化し、それより一歩遅れて —あるいは manlich が普及したことの影響を受けて— wiplich も頻繁に用いられるに至る。中高ドイツ語文芸の最盛期当時においては、この両語は比較的モダンな語彙に属していたのであろう。両語は明らかに宮廷的騎士文化の中でドイツ語に定着したと考えられるが、これが大まかに言ってドイツ語圏西部から普及して行ったことは、この両語を登場させない英雄叙事詩におけるのとは対照的に „Straßburger Alexander“, „Eneid“, またハルトマン、ヴォルフラム、ゴットフリート等の作品における使用によって暗示されている。

ドイツの騎士文化はフランドル地方からの影響を色濃く受けており、その跡は言語の上にもいろいろと認められる。⁵⁶⁾しかし manlich・wiplich の両語の普及を西北方からと限定しうるか、広く西方からと言うべきか、研究の現段階では、筆者は明言を控えざるをえない。

manlich および wiplich の基本的な意味を「男性的」「女性的」等と規定することは容易である。しかしこれらの語はどのようなコンテキストで用いられ、中世文芸の世界においてその「男性的」「女性的」は、具体的にいかなる意味内容を有しえたか、そして 12 世紀から 13 世紀における騎士文化の展開の中で、それがどのような変化を見せるか、かかる関心から、両語の示す意味の變を筆者はいささか探ってみたのである。wiplich は時として忍従の心情との、かと思うと感情を抑制できぬ非理性の行動との関連で用いられることもあるが、その大多数は優雅、誠実、優しさ等を具えた宮廷婦人に対する称賛との関連で使用されている。他方、manlich はその用例

の圧倒的多数が、勇敢で雄々しい性格や行動を指しているが、それはやがて情を弁えた、フェアな、誠実な、優雅な性格や行動との関連でも使用されるようになる。ここに至ると、たとえ本来 *wip* と *man* が反義語であったとしても、*wiplich* と *manlich* はもはや必ずしも反義語ではない。文例 8) に窺われる *wiplich* の意味と文例 53), 54) の *manlich*, 文例 29)~35) の *wiplich* と文例 55) の *manlich* の間には、相通ずるものが存在し、成熟した宮廷文化の中においては *wiplich* も *manlich* も、優雅、誠実、憐愍等、共通の宮廷的美徳を指し示すのである。

本稿を草しているとき、田辺聖子氏による『源氏物語』男の世界⁵⁷⁾が筆者の目に触れた。繙いて、「雄々しき」頭の中將と対照される「女々しき」光源氏に紫式部は軍配を上げているという田辺説にたまたま出会い⁵⁸⁾、筆者は微笑を誘われる。中世ドイツ叙事文芸にあっては、*wiplich* も *manlich* も共に宮廷的な意味で *positiv* に用いられることが圧倒的に多く、両語の意味の間に価値の優劣は論じがたい。ただ *wiplich* が男性に関して用いられると、もっぱら「女々しい、弱々しい」等といった *negativ* な価値表現とな⁵⁹⁾るのに対し、*manlich* が「優しさを欠いた、凶暴な」等の *negativ* な意味で使用される例は筆者の資料には一つとしてなく、たとえこれが女性に関して用いられる場合ですら、それは「毅然たる、凛々しい」等といった *positiv* な価値を表現するのである。⁶⁰⁾

以上述べたことは、筆者の手もとの僅かな資料を踏まえるに過ぎない。研究を発展させるためには、今後さらにテキストの幅を拡大し（たとえば叙情詩、宗教文芸等にも）、また他の類義語をも含めたものに調査を広げてゆかねばならぬであろう。はじめにことわたった通り、本稿はあくまで準備的なスケッチに過ぎない。

注 釈

- 1) たとえば独和大辞典（小学館 1985）参照。同書にはさらに文法用語としての *ein weibliches Hauptwort*、音楽用語としての *weibliche Endung*、韻律学用語としての *ein weiblicher Reim* 等があげられている。その他 Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 6 Bänden (1976-81) 等参照。

中高ドイツ語に関しては Georg Friedrich Benecke : *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. Ausg. von Wilhelm Müller und Friedrich Zarncke. 3 Bde. - Leipzig 1854-66. Matthias Lexer : *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*. 3 Bde. - Leipzig 1872-8 参照.

2) 調査の対象としたのは次のテキストである :

- ① Pfaffe Lamprecht : *Das Alexanderlied* (Straßburger Alexander). Text, Nacherzählung, Worterklärungen, hrsg. von Irene Ruttman - Darmstadt 1974
- ② Heinrich von Melk : *Das Priesterleben ; Von dem gemeinem lebene ; Von des todes gehugde*. Aus : *Die religiösen Dichtungen des 11. und 12. Jahrhunderts*. Nach ihren Formen besprochen und hrsg. von Friedrich Maurer. Bd. III - Tübingen 1970
- ③ Pfaffe Konrad : *Das Rolandslied*. Zweibändige Ausgabe von Dieter Kartschoke. Bd. I : *Mhd. Text und Übertragung* - München 1971
- ④ Herzog Ernst. In der mhd. Fassung B nach der Ausgabe von Karl Bartsch hrsg., übers., mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Bernhard Sowinski. (Universal-Bibliothek Nr. 8352-57) - Stuttgart 1970
- ⑤ Heinrich von Veldeke : *Eneasroman*. Nach dem Text von Ludwig Ettmüller ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Dieter Kartschoke. (Universal-Bibliothek Nr. 8303) - Stuttgart 1986
- ⑥ Moriz von Craûn. Hrsg. von Ulrich Pretzel. 4., durchgesehene Aufl. (ATB. 45) - Tübingen 1973
- ⑦ Hartmann von Aue : *Erec*. Hrsg. von Albert Leitzmann, fortgeführt von Ludwig Wolff. 6. Aufl. besorgt von Christoph Cormeau u. Kurt Gärtner. (ATB. 39) - Tübingen 1985
- ⑧ Hartmann von Aue : *Gregorius*. Hrsg. von Hermann Paul, 13. neubearb. Aufl., besorgt von B. Wachinger (ATB 2) - Tübingen 1973
- ⑨ Hartmann von Aue : *Der arme Heinrich*. Hrsg. von Hermann Paul, 15. neubearb. Aufl., besorgt von G. Bonath (ATB 3) - Tübingen 1984
- ⑩ Hartmann von Aue : *Iwein*. Hrsg. von G. F. Benecke u. K. Lachmann. neu bearb. von Ludwig Wolff. 7. Ausgabe. Bd. 1. Text - Berlin 1968
- ⑪ *Das Nibelungenlied*. Nach der Ausg. von Karl Bartsch hrsg. von Helmut de Boor. 21. revidierte u. von Roswitha Wisniewski ergänzte Aufl. (Deutsche Klassiker des Mittelalters) - Wiesbaden 1979
- ⑫ *Diu Klage*. Hrsg. von Karl Bartsch - Leipzig 1875 (Nachdruck :

Darmstadt 1964)

- ⑬ Wolfram von Eschenbach : Parzival. Text, Nacherzählung, Worterklärungen, hrsg. von Gottfried Weber. 2. Aufl. - Darmstadt 1967
 - ⑭ Wolfram von Eschenbach : Willehalm. Titulrel. Text, Nacherzählung, Anmerkungen und Worterklärungen, hrsg. von Walter Johannes Schröder u. Gisela Hollandt - Darmstadt 1971
 - ⑮ 同上.
 - ⑯ Wirnt von Gravenberc : Wigalois, der Ritter mit dem Rade. 1. Bd. Text. Hrsg. von J. M. N. Kapteyn. (Rheinische Beiträge und Hilfsbücher zur germanischen Philologie und Volkskunde. Bd. 9) - Bonn 1926
 - ⑰ Gottfried von Straßburg : Tristan und Isold. Hrsg. von Friedrich Ranke. 7. Aufl. - Berlin 1963
 - ⑱ Rudolf von Ems : Der guote Gêrhart. Hrsg. von John A. Asher. 3., durchgesehene Aufl. (ATB. 56) - Tübingen 1989
 - ⑲ Kudrun. Hrsg. von Karl Bartsch. 5. Aufl., überarbeitet und neu eingeleitet von Karl Stackmann. (Deutsche Klassiker des Mittelalters) - Wiesbaden 1965
 - ⑳ Wernher der Gartenaere : Helmbrecht. Hrsg. von Friedrich Panzer. 9. Aufl. besorgt von Kurt Ruh (ATB. 11) - Tübingen 1974
 - ㉑ Konrad von Würzburg : Engelhard. Hrsg. von Ingo Reiffenstein. 3., Neubearb. Aufl. der Ausgabe von Paul Gereke. (ATB 17) - Tübingen 1982
 - ㉒ Konrad von Würzburg : Kleinere Dichtungen I. Der Welt Lohn·Das Herzmaere·Heinrich von Kempten. Hrsg. von Edward Schröder. 10. Aufl. - Hedingen 1970
 - ㉓ Konrad von Würzburg : Kleinere Dichtungen II. Der Schwanritter·Das Turnier von Nantes. Hrsg. von Edward Schröder. 5. Aufl. - Hedingen 1974
 - ㉔ (Wahrscheinlich von) Ulrich von Etzenbach : Herzog Ernst D. Hrsg. von Hans-Friedrich Rosenfeld. (ATB. 104) - Tübingen 1991
 - ㉕ Seifried Helbling (Der kleine Lucidarius). Hrsg. und erklärt von Joseph Seemüller. - Halle a. S. 1886 (Nachdruck : Hildesheim·Zürich·New York 1987)
 - ㉖ Ruprecht von Würzburg : Die zwei Kaufleute. Aus : Mittelalter - Texte u. Zeugnisse. Hrsg. von Helmut de Boor. Bd. 2 - München 1965
- 3) たとえば Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 6

Bänden. Bd. 6. weiblichの項参照.

- 4) 他に herze との結び付きが 3 例あるが (Parzival 477・11, 551・29 ; Der guote Gêrhart 5002). これらの herze を身体部分と見做すことには無理があらう.
- 5) 長母音を示す ^ の有無はここでは引用テキストのそれに従う. wíplich と wíplich, manlich と manlich の区別も校訂者によるかなり恣意的なものであるが, ここではそれについてもすべて引用テキストに従う.
- 6) 次のような wíplichez wíp という表現は, 形容詞 wíplich が即物的性別表示から遠く隔たった端的な例を示していよう:
mit tôde giltet nu dîn lip / daz ie sô wíplichez wíp / durch dich zebrach unser ê. Willhalm 75・11-3 (さあ, そなたは死をもって, かくも wíplich な婦人がそなたゆえにわれわれの掟を破ったことの償いをするのだ.) 類似例 Parzival 10・17
- 7) あるいは文例 38) をこれに数えるべきか?
- 8) また Parzival 10・12 の wíplich 等にも「母性」の響きがあるし, 文例 7) の wíplich も 一接続詞 und の解釈如何にもよるが—「母性的」なニュアンスをもって解すべきかも知れない.
- 9) 文例 4) 参照.
- 10) 165, 297, 537, 1020
- 11) 5179, 11548
- 12) 文例 25) 参照.
- 13) 894, 3010, 3280, 5107, 5762, 5913, 6224, 6386, 9702, 9711, 9940
- 14) 文例 36) 参照.
- 15) 1603, 1800, 2299
- 16) 721
- 17) 4・11, 10・17, 12・6, 24・8, 28・12, 54・26, 91・7, 94・30, 110・28, 160・30, 192・2, 252・16, 257・28, 260・8, 264・6, 279・15, 301・12, 332・13, 394・13, 404・24, 414・30, 431・10, 435・16, 477・11, 510・20, 547・28, 551・29, 614・29, 630・20, 643・24, 656・4, 696・1, 729・22, 734・12, 819・25
- 18) 14・7, 75・12, 157・8, 160・15, 169・4, 248・1, 260・8, 456・13
- 19) 5・1, 34・3, 36・4, 96・2, 115・4, 130・2, 153・4
- 20) 272, 8269, 8661, 8969, 9137, 9141, 9179, 9974, 11455, 11572
- 21) 1651, 8299, 8467, 18084
- 22) 1662, 2164, 2318, 2936, 3001, 3211, 4997, 5002, 5219, 5222, 5243
- 23) 文例 1) 参照.
- 24) 4420

- 25) 45, 48, 64, 255, 1693, 3452
- 26) I・1178, I・1344, I・1359, II・970, XI・57
- 27) 166, 245, 373, 873
- 28) Rudolf Schützeichel : Althochdeutsches Wörterbuch - Tübingen 1969
- 29) 文例 4) 参照.
- 30) 12世紀末期に成立した作品であるが, Fassung Aは断片しか伝えられていないので, 筆者はFassung Bを使用した. この成立は13世紀初期であるけれども, 描かれた世界の基調は, ハルトマン, ヴォルフラム等のそれに先立つものである.
- 31) 「むすび」参照.
- 32) 類似文例: Willehalm 152・13, 281・7等.
- 33) 単なる即物的性別指示から隔たった極端な例として, 勇猛に戦う女性に関連してmanlichの用いられたEneid 8793, 8827, 8906を挙げるができる.
- 34) 文例 8) 参照.
- 35) 類似例Parzival 430・20
- 36) 1633, 1715, 2705, 3246, 3803, 4527, 4559, 6210, 6782, 6886
- 36a) 2947
- 37) 44, 1190, 1695, 1698, 1794, 2007, 2308, 2357, 3356, 3743, 4107, 4593, 4763, 4966, 5138, 5568, 5575
- 38) 242, 1596, 1840, 1855, 3630, 3725, 4063, 4071, 4124, 4449, 4638, 4714, 5919, 5942, 5997, 6057, 6183, 6328, 6766, 7214, 7297, 7584, 7837, 8737, 8761, 8793, 8827, 8906, 8926, 9068, 9502, 9739, 10760, 11311, 11519, 12141, 12508
- 39) 845, 904, 2534, 2629, 5773, 8144, 8619, 8838, 9099, 9187, 10042
- 40) 2092, 2387
- 41) 3004, 3719, 3722, 7101, 7236
- 42) 1025, 1351
- 43) 15・15, 39・3, 57・1, 89・22, 90・26, 90・27, 92・19, 101・22, 107・25, 108・18, 110・8, 111・19, 112・27, 112・30, 121・10, 172・7, 172・12, 188・15, 196・23, 213・15, 248・21, 252・23, 260・27, 291・6, 297・14, 299・12, 305・29, 315・21, 316・13, 317・23, 317・29, 329・9, 331・23, 344・5, 361・6, 364・29, 370・1, 386・2, 410・6, 415・5, 418・22, 427・27, 430・20, 451・4, 451・19, 455・28, 461・16, 520・30, 524・13, 527・30, 538・18, 548・6, 564・25, 583・24, 597・27, 625・5, 649・14, 665・19, 675・30, 677・24, 678・21, 692・13, 698・10, 701・20, 704・28, 708・4, 712・15, 717・27, 732・9, 736・7, 737・16, 747・13, 763・24, 820・3, 823・24, 823・27, 825・5

- 44) 7・3, 11・1, 11・6, 11・15, 13・7, 14・14, 19・15, 22・3, 24・10, 26・10, 29・10, 32・26, 40・30, 46・7, 47・7, 51・19, 52・8, 74・12, 77・15, 77・18, 95・3, 95・4, 96・25, 105・6, 149・12, 152・13, 152・17, 153・14, 165・26, 208・14, 226・7, 226・30, 233・2, 242・8, 253・21, 254・15, 260・13, 271・28, 281・7, 300・18, 304・4, 313・25, 315・15, 322・1, 342・21, 343・1, 348・29, 354・26, 357・14, 362・10, 362・23, 367・10, 368・19, 372・6, 374・21, 375・2, 380・23, 382・21, 389・21, 412・3, 413・19, 422・7, 424・26, 430・17, 435・8, 444・26, 453・2, 456・12, 458・11, 459・24
- 45) 78・2
- 46) 3124, 7394, 7537, 10170, 10330, 10487, 10911, 10943, 11017, 11093
- 47) 5469, 5940, 9836, 10855, 13110, 13252, 15777, 18454, 18456
- 48) 773, 803, 1158, 1336, 1632, 2038, 4495, 6642
- 48a) 3683
- 49) 606
- 50) 902, 1363, 1455, 1553, 2122, 2155, 3104, 3883, 3897, 4217, 4833
- 51) XIII・26, XIII・68, XIII・73, I・554, I・852, VIII・1144, VII・979, VII・1190
- 52) 注 28) 参照.
- 53) たとえば文例 42), 43) 参照.
- 54) 1840, 6057, 8793, 8926, 9068, 10760
- 55) ミンネの場面での *manlich* の使用は „Eneid“ にも見られる。しかし „Eneid“ においてこの語がミンネの場面に用いられるとき、おおむねそれは愛する者たちの絡み合いを闘争に譬える場合である (1840, 1855等)。これと文例 56)~58) 等との比較はハルトマン、ヴォルフラム等の世界とフェルデケとの隔たりをむしろ浮かび上がらせる。
- 56) *Deutsche Wortgeschichte*. 3 Bde. 2., neubearb. Aufl. von Friedrich Maurer u. Friedrich Stroh - Berlin 1959 (Grundriß der germanischen Philologie. Nr. 17). Bd. I, S. 157ff. 参照.
- 57) 岩波書店 1991
- 58) 133~88ページ.
- 59) 文例 36), 39) 等参照。また女性を誘惑者とする *negativ* な文例が筆者の資料には 1 例見出される。文例 4) 参照。
- 60) 上注 33), 文例 40) また, „Willehalm“ 226・30, „Wigalois“ 11017等参照。